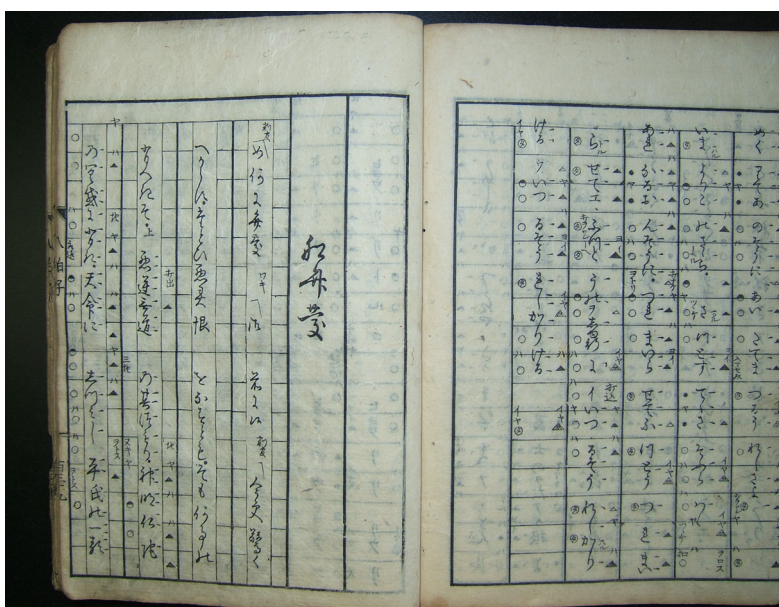


虎溪堂亀曳 『日本古典音楽文献解題』より 『八拍子』

縦に十六個ならぶ升目が、八拍子二鎖分をしめしている。面白いのは、同じ安永期の『軒之玉水』や現代の八割の書記法が、横線の上を、拍子がくる位置と定めているのに対して、『八拍子』は、升目の中央を拍子のあたる位置として、線の上は拍と拍の間を示すことになっているという点である。拍にのみ焦点があたり、一つ一つの拍がそれぞれ経過点ではなく、質量をもった面としてとらえているという印象さえあたえてくれる。



標題 内題…

標題紙…

奥附…

その他…謡曲八拍子(跋)、八拍子(柱)、

八拍子 下(題簽)

著者 奥附…

その他の場所…

出版 版次…

出版地…皇都

出版社…菊屋七郎兵衛・村上勘兵衛・山

本平左衛門(刊)

出版年…

その他の場所…跋 安永8(1779)

形態 冊数…一冊 頁数…五七丁

寸法…26×19(cm)

状態 写本版本の別…版本 現物複写の別…現物

備考 安永八(二七七九)年 平安山常綱跋。

全三冊のうち下巻のみ。